

原子力談話会ニュース

1955・1・24

～ 目 次 ～

研究班について	2 ^P
原子力談話会の諸兄へ (山口省太郎)	4
原子力内閣委員の在京委員会	6
選挙について — その結果 — (盛管委)	8
〃 — 京都の意見 — (西田稔)	9
常任委員会報告	9
会計報告	10
支那の動き 仙台より (伊藤 惺)	11
分科会について — 東京 —	12
京 都 (上田 顕)	12
科学朝日「英口の原子力工場」翻訳附末記 (太塚)	13

グッドマンの特別講義	14
グッドマン文書について (服部)	14
原子力発電資料調査会設立	17
雑誌「原子力」について	18
伏見さんからの通信	19
寄贈、及心講入四書	19
一つの出来事について (森一久)	20

e + c

N₁ 7

研究班について



原子力予算打合せ会構造部会委員中の吉田人（杉本、伏見、武田、矢木）の手で進められてきた、原子炉設計基礎研究班については、昨年11月12月の間にはなお原子核物理学者の主張によって足ふみ状態にあつたが、吉田人中の主要メンバーが海外調査に行くことになったために、その前（12月25日前）に結成したい意向で募集広告がおこなわれた。結成は遂に年内に出るはかつたが、今年の1月12日には、応募者中の物理研究者（のうち、大学および科研の連中）が科研にあつまつて、意見の調整をほかり、19日には、研究班の第1回会合がおこなわれた（はずである）。

研究班の問題は、主として核物理学者と、他に一部の工科関係者に直接関連した問題であるが、われわれ原子力談話会は、この研究班の問題から直接関係の影響を必ず受けるものと思われるので、特に重要視すべきである。

たとえば、東工大の武田研究室では、武田第一教授はがさへさへ研究班に参加するので、研究班の内と外にいる人の間の調整が研究室内部の切実な問題として出て来ている。このため、研究室では討論を何度もくりかえして、意見の一致するところをみつけ、お互いが割れないように努めることになり、とくに「情勢判断には外部の人たちの意見を十分にきき、また公開討論の場をもつける」おねの線が出た。

原子力談話会でも、12月28日午後、科研に有志14名が集つて、研究班をめぐって討論したが、その際上記の工大の実情などもきいて、お互いの態度についてかなりけつさり意見をのべあつた。

結論を先にのべれば、精進湖における線を両確認したといえる。すなわち諸種の事情によつてはいる人もでてくる現状であるが、しかしそれによつて二つに分れることはあつてはいけな。研究班にはいった人ができるだけ正しく行動してゆく上にも、外の人との運けいが絶対必要である、という認識である。そして現在の情勢では、研究班には参加すべきではないということば原則として正しいと考えている。

この研究班の問題について、広く各委員の意見を明かにすべし（福永君）という主張と、まだ今頃そういうことをやるのはおそすぎる（岡本君）という主張があるが、意見のある委員の投稿がのぞましい。

なお、研究班募集広告については、武田吉田人に別記のよりの意見書を出

すことに皆の意見が一致した。それは12月30日、大塚、服部両氏が工大で直接武田氏に手渡した。

〔注：現在、研究班参加者名はまだ完全にわかっていない。〕

★ ★ ★
「意見書」

研究班世話人

武田栄一様

1954年12月30日

原子力談話会 有吉★

私達は去る12月28日、科研に集って構造部会の研究班をめぐって
集合いを行いました際に、先に原子核談話会通信にのせられた募集公告につ
いて、次のことを世話人に申し入れることに意見が一致しました。これは現
在の世話人の方の研究班をつくらうとされる努力が事実上物理学者の分裂を
招く結果になることを思ひますゆえに、世話人の方々には少くとも必ず守っ
て頂きたいと考える条件であります。よろしくお取計い下さるようお願い
致します。

私達は学会評の主張するいわゆる3原則を確立するためには、まずこん
どの研究班についても自らがそれを実現する努力をおこたってはならないと
者とす。したがってまず、その人選にあたっては民主的に行っているだけ
だいたいと述べておきます。そこで

1. 募集の期限を明示してほしい。
2. 選定の基準を明らかにしてほしい。

以上の2項目は、現在の情勢下で能力にふじた民主的な選定に絶対必要
であるかととす。たとえば定員以下の応募があつた場合にそのすべてを無
条件に採用したり、あるいは先着順に採用することなどは、物理学者みずか
ら自己の主張を棄てることでもあります。また民間会社からの参加をどう扱う
かも募集の際にあらかじめその条件が明示されているべきであります。

3. 原子核談話会通信による公告でもって、公募が全く充分であるとは考
えてほしくない。募集を承知していない物理学者も現におる状況であります。

4. 世話人の過半数が外口にある現在、世話人の責任の所在を明らかにし
てほしい。すなわち残つておられる世話人に全権があるのが、それとも世話
人代理が用意されておるかの点であります。

以 上

★ 石川、服部、衣田、富永、川崎、片岡、立花、長原、中根、
大塚、小川、岡本、小林、浅見（イロハ順）

「原子力談話会」の諸兄へ

上記のごとき一文が、大阪の矢野龍雄を通じて、山口県から送られて来たのでここにのせる。

11月6日の原子核特別委員会、予算打合せ会構造部会の「原子炉設計の基礎研究費」300万円の予算をつかう研究に参加するべきかについて討論し、学術会談の「原則の申し入れ」に対する政府の態度が明らかになるまで「参加は待つべきである」という意見が圧倒的に多数であることを明らかにしました。しかし、それに反対の意見を持っていられる古話人の諸氏（佐見、杉本、武田）はこのような多数の意見にもかかわらず、「待つべきではない」との見解をが之す。原子核談話会通信第16号（12月1日）に参加希望者の募集を発表されると共に、朝永委員長に申請して、12月8日に原子核小委員会を召集され、かき収めて参加の可否についての意見を問われました。しかし小委員会は、「原則の申し入れ」についての政府の意図の表示も未だなく、それに非の打ちようがないことから「11月6日の意見分布が原子核研究者の圧倒的な意見分布である」ことを再確認し、更に「古話人の諸氏がこの意見分布にあらわれた多数者の意見を尊重して行動して欲しい」という意見が小委員会の中に多数あることをあきらかにしました。

このような小委員会の意見をまとめるために積極的に発言したものとして私は次の二つのことを皆さんにお願ひしたいと思います。

1. 学術会談の諸原則に従って日本の原子力の研究をすすめるためには「学者の良心が礼束では買へない」ことを先づはつきりとさせねばならないと思います。300万円（大蔵省の査定で150万円にけずられた）の上記の研究費は、他の研究費が大蔵省の査定でけずられた現在では「学者の良心の有無を計る唯一のもの」となりました。この予算が原子核研究者の多数が「原則が弁たされたか、どうか、うたがわしいから待て」というのに、その意図をふみにじつて、この予算がつかわれるようなことがあれば、研究者の総意にもとずく原子核特別委員会の权威はうしなわれ、原子核研究者の節操はうたがわれるでしょう。「学術会談の原則に従って原子力の研究をおすすめる努力」の「中心」である皆さん方が以上の点について充分討論された上ではつきりとした意志を古話人のオマに表明されるようにおねがい致します。

2. 「現在この研究費をつかうことを待つ」ことについての世話人諸氏の心配の中ずもつとも重大なことは、150万円の金がつがえなかつたために、学術会談の諸原則を守る立場での基礎的な研究が、このような諸原則を無視する人々による研究に立ちおくれ、今後「実質的な発言権がうしなわれる」ことであると思ひます。しかし上記のように現状のもとでは、この予算をつ

つかう研究に参加せず 学者の良心をあきらかにすることが原則を守る立場を強めるために是非必要なことであると考へられます。従つて私は研究費にことりくというような困難な現状のもとでも、断乎として研究を促進し、然る原則な研究者にまけない成果をあげる決意を、みなさん方が古話人の方々に明らかにされるようお願い致します。

最後にもう一度くりかえしますが、私達自身の唯一のためには、大義名分に従つて行動すること、多少の意見の相違があつても一致して行動することにあると思います。私達がこのような立場を守つて始めて多くの他の研究者や口氏の同情と支持を獲得出来るでしょう。これに対して政府がこのような予算を出した意図はすくなくも現在まで原則に従つて統一を保つてきた原子核研究者の中に「クサビ」をうちこみ、学者の戦線のもつとも良心的な一端をきりくずして、日本の全科学者を支配する巨めの第1歩にしようとするところにあると思います。従つて私は今ここで古話人の方々が づるづると研究費をつぎぬすに、一歩ふみとどまられる（研究を放棄するのではなく、しばらく待つ）ことが是非必要なことだと思ひます。（1954・12・の夜）

山口 省太郎（阪大助教授、学校特別委員
委員会委員）

4の日の動き

rom

◇ 1の日 原子炉基ソ研究班 才1回会合（本学士院）

◇ 24日 原子力問題委員会

主 要 評 題

1. 米口に於ける原子炉学校留学生の特

2. 伏見康治氏イギリス渡航不能に關する報告

〔注：伏見氏は、民科の主要メンバーであるとの理由で イギリス側が 拒否したので、外ム省は 査証申請をとりさげさせてたものである。〕

この欄は ニュース編集后 手に入つたものを まとめたもので、詳細は次号に掲載の予定である 係。

原子力問題委の在京委員会

1月10日午前、小椋委員長代理の司会によって開かれた。この席には第会長と兼重副会長が出席し、この御両人の下請相談に応ずるという形になつてしまつた。

議題は (I) 米口から寄贈される原子力文献の保管方について、(II) 米口への原子力留学生について、であつた。

(I) については、先のニュース中原子力問題委の中に報じたとあり、變和(前)通産大臣が訪米中に贈与車としてもらつて来り4万5千冊(1トン)の原子力文献をどこが保管するかの問題であつて、これに対し、口会図書館と工業技術院が引受けたいと申立てている。學術会評もまじへて話し合ひを行ふを決定するはずのところいまだ話着をみないのである。会長(および副会長)がその旁にあつてゐるのであるが、問題委員会をきいておきたいといふのである。

意見を交換しあつた結果の結論は、(1) 受入れは口会図書館、(2) 実際には便利のよいところへおく、たとえば工技院へおくことも考えられるが、しかしそれらは暫定的なもので、将来適当な研究機関ができたときにはそちらへ移すべきものである。(3) 口会図書館の中に運営委員会をおくようにし、委員構成は學術会評の意見をきくようにしてほしい。そしてこれによつて、原子力文献利用の方法や今後の方針などの決定をする。(5) 整理はできるだけ早く、そして研究者の便を考へること、以上である。〔註：もちろんこれがどう話し合ひの席に反映されるかはわからないことである〕

(II) の留学生の問題は、次のとおりである。すなわち例のアメリカの原子力学校へ人を送るよう外務省へ通知が来た。ところがその詳細はわかつていない(同10日午後外務省でそのための会評があり、詳細がわがつたはず)。ただ、アメリカ大使館の科学アタッシェ ラポルテ〔註：この人物は昨年暮から来任したもので、原子力問題でも注目すべき人物と思われる。もと科研にいた日本通かつ日本語通〕などから確かめたところでは、その内容は

1. アルゴンヌで原子炉の学校が開かれる。これは20人ぐらいで、うち2人を日本から出すように、費用FOAもち、2月1日までに申込、開校は3月1日。

2. オークリッジにおいてアイソトープの学校(講習)。日本2人(費用日本もち)、2月1日までに申込。5月開校。なかがらコースに分れてゐる。

1 コース4題目。

3. カンに関する学校。

である。ところで、外務省にまたこの件は、正式には、STACを通じて各
社に通達され、その後外務省が決定するものであるのだが、こんどは期日
の問題もあって、STACの事務局長の承認だけを経て、外務大臣が原子力
利用準備調査会へ諮問することになろうというのが、外務省の態度という。
してみると、この問題も茅（調査会委員）の責任にまわってくることになる。
そこで茅氏に調査会の意向をききたいというのである。

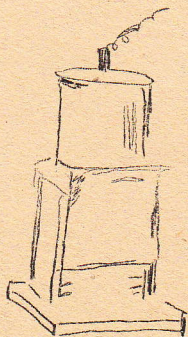
しかる、人を送るべきかどうか（とくにアルゴンヌのケース）は外務省（と
STAC）が考えることで、送るとなったときに、どういう形で人を送らな
のがよいか考えてほしいというのが茅氏の注文であった。

委員会の討論を右にのべれば条件とくに義務の有無の問題すらはっきりせ
ぬのに具体的に考えられぬ、ただし、今度が始めてだし、あとあとに
問題が出てきそうだから、できるだけ広い意見をきいてほしいということに
なった。

大塚委員は、この委員会が会長の相談に応ずるのは結構だが、留学生の問題は、
若い研究者の立場を考えてぜひこの委員会では討議してほしいと発言
した。

これに対して小塚委員長代理は、留学生の問題は当然この委員会で討議す
べきことと考える。しかし、こんどの2月1日向けの期限つきの中での答を出
すわけにはゆかないと答えた。

けっきょく、茅氏は、この人選でどうすれば筋をとおしたと主張できるり
を考慮中であり、また口際原子力技術会談に人を送る場合も同様の問題があ
ると自分でわかっており、目下緊要の最中という形である。



選挙について — その開票結果 —

投票用紙と選挙法をいきなり送つたため、京都支部から別項のような抗議がありました。これらの案についても一応は考えた上できめた選挙法なので、手荒さ上かなり不備な案はありましたがそのまゝ選挙を行うこととしました。

又切は1月16日でしたが、1月17日の朝に到着したものが16通ありましたので18日の夕刻から開票しました。選挙管理委員会(長原君1席)と喜多尾君が立会いました。

有権者71名中、投票数53名。

有効投票 209票 (1名は2名連記, 1名は3名連記のため)

開票の結果は次の通り。

富永	26	小川	6	井上	3	武右	2
服部	23	森	5	上田	"	萩田	"
大塚	"	伊藤	"	立花	2	矢島	"
長原	"	川崎	"	高木	"		
西田	19	武藤	4	園田	"	滝沢, 片岡, 中根	
神保	10	松尾	"	小林	"	鈴木, 柴田,	
三雲	8	市川	"	浅見	"	喜多尾	各1
夏目	7	島	3	佐々木(行)	"		

選挙規約に従うと 物理2, 化学2名, 工学2名, 連記にかがわらないものの3名を遊ぶのであるが, 委員会が2時間以内の討論の末 工学の2名は神保および高木又は「武右」をとらなくてはならないが 2票というのはいさぎに少ない。従つて物理偏重を避けるという点から考えると残念だが, 工学は1名だけとし, 最高得票者からもう1人とることになりました。ちなみち

新選管委員会のメンバーは

富永, 服部, 夏目, 松尾, 神保, 長原, 大塚, 西田, 三雲, と決定しました。

規約により,

富永, 服部, 夏目, 神保, 長原, 大塚, 三雲

を, 常任委員会を組織, 会の運営を行うこととなります。

(選挙管理委員会)

選挙について

—— 京都支部の意見 ——

先日、1のちち年度運営委員会の選挙に関する通知を受け取りました。京都ではすでに帰省している会員もあり、残函者だけで話合つて次のような意見を出しました。もう一度、各々の意見を検討し、選挙に関する事項に両者感を拂つて頂きたいと思ひます。

1. 運営委員会はN.E.C.の今後の動向を決定して行く重要な機能をもつものであるから、多くの意見をもとにして検討しつくされた結論にもとづく選挙法で並べねばならない。特に十人数とはいへ、東北とか関西などの会員の意見が反映して行くようなものであることは、望ましい。(東京の会員と地方の会員との意見の流通は常に行われねばならない)しかし、今回の選挙に關しては、京都ではなにも聞いてはなかつたし、その他の地方の会員についてもそうだと思う。規約には人数、人選は総会で決定するとある。常任委員及び有志を会員を加えて決定された今回の選挙方法は、多くの人々の意見をきいて、N.E.C.を運営して行くこととするという考案が反映されていない。

2. どのようにして決定し、天下りの如く通告されてきたような選挙のやり方に京都タラップとしては極めて不満足である。必ず適当なステップをふんで求めてもらいたい。

3. 決定された方法では地方別の代表がでそうには思はないから、地方の

4. 「説明」の項はあまりにも表面的説明にすぎない。

5. 京都タラップ(特に湯川研在住のもの)の意見としては選挙法について両者を要請し、選挙を延期して貰いたいと思つています。

以上 お知らせいたします。是非 討論の上御返答願ひがいます。(西田 穂)

常任委員会報告

★ --- 12月30日、有志でやっている分析会の席に大部分の常任委員が集つたので、選挙に関する京都支部の申し入れをめぐつて討論した。京都支部の指摘がだめであることは認めだが、今回は一応そのまま選挙することにした。

★ --- 1月14日、常任委員会全員出席。

1. 会計報告 別項の通り承認。

2. 選挙について、投票状況の報告の後、このまゝ選挙を行うことを再確認、開票は1〜2日延期することにした。

3. 科学朝日の残金、別項の通り決定。
4. 用語集について、三雲君より現状報告。
5. 寄贈図書、購入図書は東大物理教室12号室に届けることに決定。
6. 談話会ニュース批判、会員の意見がもつと出るようにしなければならぬことを確認した。
7. 研究会活動等の批判、支部等にごたわらず各自の部署で随時研究会活動を広げて行くことが必要であるという意見が強く出された。
8. 雑誌「原子力」について、購読について地方からの意見が非常に多いので、この点「みすず」と相談することになった。編集についても、かなり突込んだ意見が出され、出来るだけ多くの人に参加出来るよう、編集方針の会談と、率直的な会談とを別に開くことにした。
9. 研究班の問題、報告が中心になり、「精進」以来の方針である「中に入らば出るを得ナクナッタ人トモ手ヲツナイデ行ク」ということを具体化するにはどうするかをある程度討議したが、すつきりした結論は出なかった。

会計報告 (1月13日現在)

収入	原子力コロキウムより	1,623 円
	会費収入	
	一般会員 1年分 1人	500
	〃 半年分 35人	8,750
	学生会員 半年分 24人	3,600
	賛助会員 1年分 1人	1,000
	カンパ	
	森 君	3,000
	大塚君	1,350
	立花君	750
	川崎君	50
	電力経済へ用語貸賃	5,000
	科学朝日残金	25,000
	計	51,123 円
支出	サラ紙	2,700 円
	原 紙	490
	プリント代	3,850

切手	2,410	円
雑誌	1,200	
封筒	300	
領収書	140	
圖書 (少年朝日年鑑)	360	
計	11,450	円
差引	39,673	円
現任高 預金	33,500	
現金	6,173	
合計	39,673	円

以上 (会計係 服部, 夏目)

仙台だより —— 伊藤 惺君の手紙から

その1:— 仙台では、5人の会員が殆ど全く independent な部門に所属しているので共通の時間を持ち難いことが最大の種ですが、それでも毎月2回の定期的な集りと、任意の不定期的顔合せをもとうということが決定されました。そこで、最初は Nuclear Engineering と Kjeller の例のリプリントを中心に reactor による学問的興味となる案と materials について勉強を始めていく方針を立てました。勿論此の度三雲さんから送られた用語の決定についても、このような会合の機会に出来るだけ時間をとって討論したいと思っております。亡き耳末に押しつまって今年中の成果は期待出来ませんが既成事実の積み重ねはどんどん進捗しつつありますので、あまりのんびりしたやり方では追いついていけないと思います。来耳になつたらという逃げ道を避けるためにも、何とか今年中の具体的な動きを算火線にしておこうと考えて集まりをもつともつようにした次第です。(54, 12)

その2:— 第1回の試みとして Kjeller の会談の内容について話し合う時間を持ちました。所が技術的方面の理解はまあまあとして、経済的な問題が加わってくると、どのように討論をし理解していくかが分らなくなる程、勉強が足りないことを知りました。従つて殊に各口の原子力政策などという案になると今の所手をつけかねる状態です。その為、東京支部で行われたような「アメリカ原子力政策の分析会」などで啓蒙されると良いと思うのですが雑誌「原子力」が手に入らないのです。

雑誌「原子力」の第1巻もまだ見ていないのですが、何とか手に入れる方

法は無いでしょうか。勿論運搬者の許可がありて、地方の書店に頒を出すようになれば良いのですが、それ迄に1号、2号などが無くなってしまうのではないかと心配しています。

この最初の集りをむとにして、今後定期的に会合が開かれる予定ですが、その時の討論の様態などは近い中に報告できると思います。目下人数が少く、そのくせ方々にばらばらに分れているのが悩みの種です。(1・12)

“分析会”について — 東京 —

すでに先の二ニュースで報告したように、現在、東京(東京物理教室)では、力談の有志メンバーが月に1、2度集うて“分析会”を開いている。

この会の生まれたのは、雑誌「原子力」に「アメリカの原子力政策の推移」という論文をのせようとしたところ、これを誰か1人の有名人をお願いすることではどうも満足できないと考える、こういう問題に関心のある連中7名程度が集うて、分析をはじめた。そうして、この分析の会は、雑誌とは切りはなして一つの研究会とし、その討論の結果を整理して雑誌にのせることを別に相談するという立前をとった。昨耳で、すでに、1954年までのアメリカの原子力政策の推移を一応しらべたが、今後、この会で、田無の問題、オッペン問題などをあつかいたいと考えている。今年はまだ行われていないが、より成長させようと考えている。とくに東京居住者の多数参加を希望すると共に、地方でもこういう研究会を開いてほしい。

京都

——京都支部 上田 顕

京都の民科の政治部会で「原子爆と政治」という本を刊行することになり、その草案の討論会に出席して二三日感じたことを報告します。

理論12月号に11月3・4日の政治学会で「原子力と政治」に關して行われた討論の報告が載っていますが、京都の民科の政治部会では、前芝嶺三氏を中心として「原子爆と政治」という題で本を刊行することになりました。草案は第一章：水爆の被害、第二章：水爆に対する各国民の反響、第三章：アメリカの原子爆外交、第四章：平和運動(今後いかにしていくべきか)、第五章：原子力の口際管理、第六章：原子力の平和的利用となつていきます。東京は勿論第四章であつて、第六章は附録として記載すべき内容と思われまふ。第一章から第四章までの構成をみてわかるように、三月一日の水爆実験で、この奥は食えるか、この水は飲んでも害はないかと実生活と結びついて、口際的政治意識が全く無かつた人々の間に起つた水爆禁止の運動と、

本誌、長崎への爆撃以下以来世界各口で続けられてきた運動（ストックホルム・アピールなど）と二つの流れがあります。この二つは全く別個のものでないことは勿論ですが、これを頭から同一視できるものでもありません。この二つの流れをいかにして一つにまとめ更に大きなものとしていくべきか、これがオロ草の受持つ役割と考えられます。この意味でオロ草に期待したいと思います。なお今後何度かの討論が繰返されてまとめられる筈ですが、それを通じて新しく問題が指摘され、平和運動——特に口内に於ける——に大きく貢献するだろうことも併せて、この本の完成を待ちたいと思います。

科学朝日「イギリスの原子工場」^{ホン}ヤク始末記^(大塚)

精進の学校以来、みなのお力でやった上記の調査は、今年1月号で完了しました。せっしょうと整理にあたつたものとして心から感謝しています。

これに関する財政報告：

精進の学校のときの先拂	50,000.00
清算（54年12月拂）	25,500.00
計	75,500.00

（この計算の明細については、これから向合せます）

さてこの25,500円の使い方でありましたが、精進では本部費用とすることになっていましたが、予想より少し多くなりましたので、この際一部を支部活動の援助に割当てる方針をきめました。なお大塚君は整理に相当の労力を費やしたことを認め、適当額の謝礼を決定しました。これについて1月14日の常任委は次のようにきめました。

談話会（本部）へ	10,500 円
支部へ	10,000
整理者（大塚）へ	5,000
	25,500 円

支部への（まだ支部になっていない所へも）内訳は

東京支部（千葉を含む）	2,000 円
京都支部	2,000
大阪	1,000
名古屋	1,000
東北	1,000
	7,000 円

を直ちに送り、（以下 17 頁へつづく）

グッドマンの特別講義

経報のように、12月10、13、14、15日の午後4時にわたつて原子炉の特別講義があり、立教大学以外からも聴講が許された。予定の標題の内容とはすこしく違つて、実際には、

オ1日 4因子公式、輸送理論から拡散方程式の誘導。

オ2日 減速のフェルミ理論

オ3日 組分け拡散 (multigroup Theory)

オ4日 各種原子炉の優劣の一般的比較

を行つた。講義は十分な用意がなされたとは思われぬところがしばしばあつて、たとえばオ1日では、Phase-SpaceとLaboratory-Spaceとを相対する概念のように誤解したなきがある。要するに、アメリカでの経験をもグッドマンからききたいと思う内容は全くなかつた。教科書およびニュークレオニックスにすべてある内容である。

グッドマン文書について

グッドマン教授は講評の最終日に、日本に原子炉を建設する順序についての意見を述べた。先づ口運プールのことから話を始め、実験用原子炉の成つたの型を提案したが、何故か重水天然ウランニウム型だけは省略した。更に急ぐならば動力用原子炉にすぐ着手してもよいとの意見を述べた。最後に“自分の意見は諸君の目によつてではなく、私の配る文書によつて判断してほしい”旨を発言し、The Construction of Nuclear Reactorsという文書(和英両文)を配布した。(この日本語訳は神戸領事館の作成したものだとのことである) これは、かなり長いもので全文を再録するのは大変だから要旨を紹介する。 “ ”は引用をすす

1. 日本は原子力を必要とする。

“将来の日本の工業化という事は過去に於けると同様に経済的に建設され、運用され得る動力の生産量に正比例する”。

“開発された水力電気の800万KWは全口の電力の約1/3であります。川の水源が利用されればされる程水力電気の建設並に経営の費用は非常に増加し、原子力が水力と競争し得る位に到着すると思われる。

“化学的な燃料による日本の500万KWは主として口内石灰の産出によつて供給されている”現状で、“結局において”“工業原子力は化学力に打ち

勝つでしょう”。

“日本の石油生産量年間180万バレルは口内需要の9%~10%を充てにすぎません”そこで“日本政府は毎日新油田を開発する為には口内石油会社に補助金をして多大の金額を費しているが日本が四つの主たる島々は石油に關する限り殆んど種切れになつてゐる”のである。

“米口に於きましても同様な補助金制度が米口原子力委員会によつて口内に充てるウランウムの発見並に開発のためにもうけられてゐる”ことは判明である。

“米口やソ連のように動力に恵まれた口でさえも原子力が化学的燃料と競争し得る地位を証明されるとするならば、日本に於てはより一層経済的有利さがある筈だと思われる”

2. 日本は原子力を要望する。

“日本人が一般に原子力に対して神経過敏であることは容易に了解出来る。東京近在の田無の住民はその町の中にサイクロトロンのようなものを持つことに対して懐疑的であります。私の口からやつて来た、事情を知らない無知の者が日本の心血が注がれた最初のサイクロトロンを東京湾と大阪湾に投げ捨てたではありませんが、老若の人々はサイクロトロンは原子爆弾に直接關係があると思つたではありませんが、現在でも此のような誤つた考へが、此の世界に充ち充ちております。”

“原子力について悪い面もあるが、良い面もあるという事を米口の一部の人民にも納得してもらい同時に皆様も日本の方々に納得してもらつた場合には忍耐強い忍耐を必要とする”のである。

3. 工業用原子力を大規模に生産させるべき有能且つ専門的に訓練した人達が現在日本に存在すること。

“日本には技術的に訓練された人は天竺おられますが、原子力の分野で専門的な訓練と経験を持つておられる人は少い”又“それ以上に日本の最も有能な方々の中には原子核物理学、原子核化学の方面に対して觸見を持つておられる方が多いのであります。”

“日本の最も有能な科学者だけでなく、最もすぐれた engineer の若きな支持と協力がないと日本に於ける原子力工学を生産させることが困難であることは明らかだ”と思う。

4. 日本は原子力の開発に経済的に耐え得る。

“米口に於きましては公益事業会社は原子力開始に指導的割合を果して来ました。一氣の昭和や茂木の装置、器具製造会社や大膽な化学-燃料会社等も公益事業会社と一緒に一役買つております、General Electric,

Westinghouse, Du Pont, Dow Chemical, Philips Petroleum
や, Babcock - Wilcox の様な会社は会社の重要な財源、即ち有能な技
術者を此の分野に投資して、其の結果として獲むべき地位を獲得致しました。
日本の四大公益事業会社は毎年約40億円の配当を致します。日本政府はこ
れに対して源泉課税として、その2割を徴収いたします。即ちこの年間8億
円が工業原子力の分野に踏み出す最初の1年間の大略の必要額であります。
2・3年の中には年間費用は恐らく減りして行くでしょう。”

5. 日本は原子核反応器の爲の必要な資材及び知識を得ることになる。
“濃縮されたウラニウムの供給源は口運の Atom-for-Peace 即ち
平和のための原子貯蔵所であります。”

“私の推察いたす所では濃縮された原子核分裂をする材料 (Concentrated
fissile material) を口運より借り入れる爲には普通のウラニウムを
必要とする核反応器を建設し運営している事が必須条件になると思います。
それ故に少くとも 2・3年は日本は普通のウラニウムを燃料とする数基の
核反応器を建設する時期に直面すると思います。その後濃縮されたウラニ
ウムを必要とする小規模のものから次第に始めて行く事でしょう。しかもこ
の濃縮されたウラニウムは日本国内で生産されるものであるでしょうし、又
其の他は輸入される事でしょう”。

“皆様のうちの誰かが既に日本製のグラフアイトの Diffusion Length
を計り、それが核反応器に適用するかどうかを知つておられるのではないかと
思います。”

以上は抜書きなので、全体を正しくつかむことは困難かも知れないが
内容が極めて政治的なものを含んでいたことはおわかりになると思う。

政治的責任は一切お断りという条件の中でこのような政治的な文書を配布
したことは誠に残念なことであつた。

尚この前日もそうであつたが、日本の問題に対する意見を述べる時は、原
稿を一字一句も読み違えないように読もうとする努力が察しられ、フルグラ
イト交換教授の任務として原稿を読ませられているのではないかと感じた人
が多かつたようである。

なお、講義の終わった翌16日、グッドマン氏は経書に出かけて行つて、色
々と話をしている。

(版 部 学)

原子力発電資料調査会設立

昨日12月4日、"何はともあれ、まず参考とすべき重要資料を蒐集調査し、もつて関係者の知識向上をはかることが……喫緊の急務と痛感し"(報章書より)設立すべく決意した原子力発電資料調査会の設立総会が行われ、会長守川才五郎(日本動力協会会長)、副会長大山松次郎(東大工教授)で発足した。

同調査会は、1口5万円を原子力発電に関係あると思つてゐる会社から資金をあつめ、国会図書館の資料の中から選取・翻訳・分析・譯合を行うという。国会図書館に常時連絡の人をおいており、国会図書館の原子力資料室の主任である大島仁平氏も設立総会で力を約している。出資会社は次のように電力・電機・化学の組に資本が名をつらねている。国会図書館の資料を独占的に利用し、都合のよい文献を選出して、都合のよい結論を出すためにつかわれるおそれは大きい。

会員にはA—お金を出した会社、B—お金をおさず協力する団体・個人にわかれている。

なお、別に異動部会(部会長大山松次郎)というのをつくり、A・B会員が推薦する調査実働員(わかりやすくいえば、当分は翻訳アルバイト希望者のルール)で構成されている。学会関係の発起人は、内田俊一、大山松次郎、茅誠司、駒形作次というところである。この会の動きは、アメリカの原子炉学校へ大山松次郎氏の子息大山彰東大工助教授を、茅氏が強かに推して送り決つたことなども関係がありそうである。

拠金会社は、電源開発(4口)、九電(各2~3)、東芝(3)、日立(3)、三菱電(3)、新三菱重(2)、三菱造船(2)、石川島重工(2)、昭毛(2)、旭化成(2)、住友金屈(2)、明電舎、富士電、守川電、三菱日本重、三菱金屈鋳、三菱化成工、旭硝子、日産化、東洋島庄、石川島芝浦タービン(各1) 計29社(1月20日現在)である。

13頁よりのつづき

現金3000円は地方活動のために積立てておくことにしました。これはたとへば別の地方で新しく活動を開始するときに使える金であります。支部へわたした金は、支部の判断で有効に使ってもらふことにし、ただし、会計報告は本部に出してもらうことにしました。以上。

雑誌“原子力”について

★… 2号 (1955年 I号) は1月始め発売された。2号から国鉄特別
扱承認雑誌となつたので、全国の書店に出まわっているはずである。

★… 1月14日夜の常任委員会で“原子力”を原子力談話会のみんなの雑
誌に育てるために、どうしたらよいかいろいろ討議した。その結果

(イ) 発行所との協力条件をはつきりさせて、これの実行を保証させる。

(ロ) 3号が発行されたらすぐ、原子力談話会として台評会を開く。

(ハ) 編集会誌は月1回、充分時間をかけて、なるべく多くの人材で、開く
ことにする。

★… 発行所 (みすず書房) との協力条件をはつきりさせる必要があるとい
う1月14日の常任委の決定によつて、太塚・森が1月17日みすずを
訪問して、次のような条件の確認をした。

1. 従来編集事務 (校正・連絡等) は上記2名の無料奉仕であつたが、こ
れを改めて、編集事務は適当なアルバイトの人にやつてもらい、編集と
事務とをきりはなして、編集は力談、事務はみすずと責任をはつきりす
るよう努める。(但し 筆者校正は除く。)

2. 原子力談話会の会員および賛助会員は、“原子力”を2割引で購入で
きる。(みすず書房からの直接購読にのぎる。)

申込先： 東京都文京区春木町1の22,

みすず書房 “原子力” 係 《力談会員なること明記》)

3. “原子力”を毎月、原子力談話会へ、次のように贈呈する。

原子力談話会図書室	2冊
各支部	各1冊

4. 原稿料は雑誌発行后1ヶ月以内には必ず支拂う。200円 (銀紙170円)

★ 3号 予定 内容

続・アメリカ原子力政策の推移	原子力談話会
日本における同位元素の工業的利用	武谷 清昭
放射線の遺伝的影響	西脇 守
原子力講座 (II)	伏見 康治
読書案内「エネルギー資源の問題」	清水 透
Journal of Nuclear Energy 創刊号	太塚益比古
雑誌紹介・書評・ニュース・質問欄 etc.	32頁

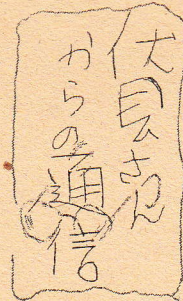
オ1 信： 1月5日付 スイス宛
(全 文)

お便り大分おくれました。今(5.I.'55) Zürich にいます。今日は Braun-Boveri を炉の模型をみせられました。計画は10MW。Uはベルギーから銅を、イギリスで製錬してもらう。電水は作る。HUBER のいる BASEL 大学で電水の PILOT PLANT を見ました。特長はU棒のいくつかを高温にして試験すること。
イタリーでは MONTE-CATINI、
ここでは B.-B. とみな会社が*

* 中心となっていて政府の方が引きづられている形です。明日(7)パリに飛びます。

オ2 信： 17日に予
(全 文)

ユーリッヒからパリにつき、
もう今日は12日です。も**



** っばら湯浅君史に見物にひ
つぱりまわされている形です。
Sadley, Chattelton の炉

を見ましたが、大した感服はありません。マイク口なんがより遙かに技術的にやさしいものである印象を受けました。日本の新聞にも出たかと思いますが、イギリスにいはく「まりました、僕だけ、別のところで時間をつぶすつもりです。

(注： この通信はいずれも大塚君あての私信である。尚伏見氏のオ英国の入国査証がとれなかった。その理由は明かにされていない — 編集部)

。寄贈図書 及び 購入図書 について 。。。。

最近ここの会員から本の寄贈を受け、又談話会の活動のために役立つと思われる本を若干購入しました。東大物理教室の服部君の部屋に揃えておくことにしましたから利用して下さい。送料をつけて申し込めば送ります。

現在あるものは、

- オ 少年朝日年鑑 昭和30年版 (購入)
(原子力のやさしい解説、宝多、普及活動に役立つ)
- オ 日本のエネルギー (資源調査会発行) (購入)
- オ 科学は前進する (ウィーバー編、みすず書房)
- オ 死の灰のゆくえ (民科自然科学部会 共同訳スクリプト、蒼樹社)
- オ 死の灰から原子力発電へ (" ")
- オ 日本の原子力問題 (民科物理部会、理論社)
- オ 調査資料 原子力特輯 No.1 (電産開発株式会社)
- オ 調査資料 No. 1 (")
- オ 雑誌「原子力」
- オ 雑誌「自然」 (3月号より寄贈される予定)

一つの出来事について 小林 一三

1月13日、やっと1日の余裕をつくって家で仕事をしていた私の手元に、一通の電報がまいこんだ。それは電力経済研究所のX事務局長からの「アスアカシキウアイタシ」という電報であつた。

翌14日私は早目にレビルに出勤した。何の用か想像もつかぬままに、X氏はすでに受付で私をまつていた。用件というのはこうであつた。

「今度アメリカで行われる原子灰処理会談（これが実はまちがつていたのだが）、日本から4名出席する。そのうち2名の入並をY電報開発総裁が占領することになった。その1人は同社のZ君に行つてもらおうとして、もう1人は原子力談話会の若い人から行つてもらいたい。今日2時までには履歴書を当局へ出す必要がある……」

いろいろと原子力問題と接触して、われわれの考えのうちでも“日本の原子力は自主的に”というところだけは、曲りなりにも理解してくれているX氏が、“力談”をこれほどまでに買ってくれる気持はうれしいとしても、足下に火のつくような話には、私も少なあてた。X氏は「他の不真面目な人がゆくよりは日本にためになるではないかとせきたてる。

まず私は、諸口の学者（イギリスのルーチット等）が集つて行つて予定の灰処理に関する民主的な口際会談のことと思ひこんでしまつた。ともかく30分の余裕をもらつてX氏に一度かえつてもらい、廊下へ出て頭をひやした私は、電話で連絡できるA君をよんだ。私のせきこんだ話に、A君は「よくわからぬが、その会議なら自分が行つてむよい」という。もう時間もない。

30分もまだず電話をかけてきたX氏に、私は「A君に直接出かけていつて話してくれ」と答えてしまつた。

このようにして、ともかく、X氏はA君の意向をY氏につたえたものと思われる。

しかし、すぐ後で、どうもこの会談はアメリカの例の原子炉学校と同位元素講習のことらしいということを、X氏はつたえて来た。

たまたま同日夜開かれた力談常任委に私は、このことを一応報告した。あまりに突飛な話であつたためか、話を取りついだ私に対しても、あまり批判は向けられなかった。

もしこれが原子炉学校等のことなら、民間会社社長などに入並させるのもまちがっているし、いねんや力談の人がY氏などの力添えで出席できるよう

取りついで私は、一体何をしたことになるのだろうか。不用意に取りついでA君にも、すまないことである。常任会から帰る私の心は重かった。

幸か不幸か、翌々日になつてA君もZ君も人並にあらわれたことを、X氏がつたえてきた。原子炉学校の方はB学術会評会長の推すJ東大助教授と工業技術院のD調査課員がゆくことになつたようだというのである。私は胸をなでおろした。但し同位素素講習の方はZ君がゆく可能性は残っている。

この事件は多くの問題を含んでいるので、以上あえてありのままを皆さんに伝へようと思つたのである。私は、双務協定ができる前であるから、この研究会は利用してもよいと思つた。これはまちがいであるか。

カ談は、こういう急な事柄を処理するような能力をもっている必要があるのが。

こういうことは、学術会評書を通じてくれ、と一回No Commentでよいが。学術会評がめずしむ強力でない現状では、それでよいとは思われないが、
“他の人よりわれわれが……”といふ考え方について。

さらに、カ談から電撃開発会社に入つてもらつた形のZ君は、もしこれが実現したら断りにくい立場にあるということ。Z君はカ談の皆の意見によつて行動したいといっているが。 etc, etc ……。

この報告は、笑つて談はずこされるなり、私の甘さを徹底的に批判して下さるなり、皆さんによりしくおねがいしたい。お互いに自分の考えをあげすけに語り、まちがいを正し、自分の立場を他の人に了解してもらふことによつてのみ、“カ談”は正しく育つものと信ずるからである。

……（ソ連の中口群への核分裂物質提供の……をききながら）

会費未納の方へ

会費未納の方は、今年3月までの会費（一般250円、学生150円、賛助会員500円）を至急下記へお送り下さい。

東京都文京区本富士町

東大理学部物理教室内

原子力談話会

なお、なるべく現金にてお送り下さると手数が省けて、ありがたいのですが（現在は封書に現金を入れても郵便法には抵触しません）。

— 新会 員 —

次の方が新しく入会を申し込まれ、常任委員会承認しました。

氏 名	所 属	専 門	紹介者
松本 元一	科 研	物 理	岡本、石川
田羽 鼎	名大 理	地球科学(鉱床学)	松尾
広川 俊吉	" "	物 理	"
川原 史子	" "	"	"
松山 守重	阪大 理	"	矢島
森田 石	九大 理	"	服部

えとせとら・イトセトラ・etc....

- ★... 今回のニュースはもう少し早く出すつもりおしたが、いろいろと手違いがあつて遅れてしまつたことをお詫びします。
- ★... 次号は 2月10日の予定であります。
- ★... 次号から、地方の動きを定期的にのせたいと思いますので、各地方、グループの報告をお送り下さい。
- ★... 各支部で、東京支部の有志メンバーがもっているような勉強会を施行するよう要望します。
例えば、経費で作られるという原子力白書(6号^{ニコフ}参照)に対する意味で、今までの各々の結果をまとめておくのもよいと思う。

★... "広 告"

今度、 X-RAY ATTENUATION COEFFICIENTS

from 10 Kev to 100 Mev

と題して G. R. White : National Bureau of Standards
Report 1003, may, 1952 ,

X-Ray Attenuation Coefficients from 10 Kev to 100^{Mev}

の報告が 教育大 三輪光雄氏の手で プリント(ガリ刷)された。

数部、原子力談話会で引きとつてありますから、希望者は 代金50円(千夫)を以て、 東大理・物理教室内、原子力談話会へ申し込んで下さい。